

平成21年 5月 5日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号：17520167  
 研究課題名（和文） アメリカ文学における銃の表象とアメリカの神話の関係に関する研究  
 研究課題名（英文） A Study of the Relation between the Representation of Guns and American Myths  
 研究代表者  
 渡邊 克昭 (WATANABE KATSUAKI)  
 大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
 研究者番号：10182908

## 研究成果の概要：

アメリカをめぐる様々な「神話」をスパイラルに巻き込みつつ、銃は、政治的、社会的、文化的に幾重にも屈折した表象を担ってきた。銃は、近年メディアと共犯関係を結ぶことにより、「撃つ/写す」の射程は、<sup>シミュレーション</sup>個体間から国家間、さらには時空を超え、歴史性にまで及ぶようになった。このように重層的な象徴性を帯び、アメリカ的想像力を駆動してきた銃は、ジェンダー、エスニシティを横断し、屈折と変容を繰り返してきた合衆国そのものと怪しく重なり合う。交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,100,000	0	1,100,000
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,000,000	360,000	3,360,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：銃、アメリカ、神話、歴史表象、9.11、メディア、トラウマ、政治学

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、銃社会アメリカが抱える諸問題を、合衆国憲法修正第2条の解釈をめぐる議論に代表されるような社会科学的手法ではなく、文学テキストを駆使した文化表象の視点から柔軟に捉え、銃に賦与されてきた直線性、即時性、自己実現性を前提とする既成の議論を文学研究の立場から見直そうとするものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、入植以来アメリカ人の集会的無意識を規定し続けてきた銃文化が、テクノロジーの発展とともに大胆な変容を遂げつつも、依然としてアメリカの神話や外交政策と密接な共犯関係を保っているという視座から、アメリカ文学における銃文化の表象を詳細に分析し、文学テキストが、銃文化に彩られたアメリカの神話に対していかなる捻りを加え、どのような対向言

説を提示してきたかを、考察しようとするものである。これまでアメリカ人が茫漠たる荒野を征服するのに不可欠と見なされてきた、銃の不可逆的な自己完結性が、いかにアメリカ文化の内側から脱構築され、グローバル化の覇者アメリカへと批判的にフィードバックされていくかを検証し、研究成果を公表する。

### 3. 研究の方法

まず、植民地時代から19世紀、世紀転換期から20世紀前半、20世紀後半から現在という特徴的な三つの時代区分ごとに、各時期の文学テキストから銃の表象をできるだけ網羅的に抽出し、文化的アイコンとしての銃が辿った軌跡を通時的に描出した。次に共時的観点より、銃文化がいかなるかたちで、どのような文化的ディスコースを作動させてきたかを、小説、演劇、詩のみならず、アート、映画、写真などの視覚芸術、メディア、ジェンダー、エスニシティ、奴隷制、帝国主義を視野に入れながら、多角的かつ具体的に考察した。しかる手続きを経て、アメリカにまつわる様々な神話の脱神話化と再神話化のダイナミズムにおいて、銃がいかなる意味において両義的役割を果たしてきたのかを「アメリカン・サブライム」との関係において検討し、その象徴性の変容を探った。

### 4. 研究成果

(1) 「小さな切手ほどの大きさに過ぎない南部スモール・タウンを舞台としながらも、フォークナーの作品に描き込まれた銃は、南部の歴史、さらにその現実に深く関わってきた人種の「境界」の溝を鮮やかに提示すると同時に、その「境界」が危うさや脆さをも兼ね備えたきわめて曖昧なものであることを浮かび上がらせている。さらに、登場人物たちが

構える銃は、狙った相手との間の埋め尽くすことのできない、「恐怖」に彩られた空間を絶対不可侵なものとして確立すると同時に、逆にその空間を押し潰すものでもある。また、銃から発射された/発射されるはずだった弾丸の射程は、それぞれの銃に固有の物理的な距離の限界内に留まらず時・空をも超え、その弾道は、直線のみならず円環の可能性までも含む複雑で妖しげな軌跡すら形成する。しかも、銃身に刻まれたライフルによって回転を与えられた弾丸は、空間を移動しながら、南部に纏わるさまざまな「神話」を一瞬のうちに巻き込む混沌としたスパイラルをそこに生じさせ、「神話」に纏わる悲哀と郷愁、苦悩と矛盾に喘ぐ南部の姿を重層的、多角的に、鮮やかに映し出すものとなっている。

(2) 公民権運動時代に白人から発射された、人種的不正義を象徴する銃は、南部の神話を擁護するものだった。白人によって発射された銃は、時代の「疫病」のような「熱」を、白人優越神話の幻想を放射するものだったと言える。外敵に向けて撃たれた時、銃は南部の外へ神話の幻想を運ぶメディアとなり、神話の崩壊を加速させることになった。内部における政治的闘争の銃は、歴史のアイコンとして放置されたが、その結果過去の神話が亡霊のように土地にとりついてしまった。このような公民権運動時代の銃の表象性を捉えて、黒人作家のボールドウィンも、南部に住む白人作家ウェルティも、この時代を語る物語の重要なモチーフとして銃を鍵にナラティヴを構築した。活動家でもあったボールドウィンは、黒人の持つ発射されることのない銃を抗議のシンボルとして神話を変革する可能性を描いた。ウェルティは土地に潜む声としての銃を描き、その声の主体がすでに神話の基盤を失い実体のない存在であることを明らかにした。二人の作家の描いた銃は、聖書の下

あるいは草むらに放置され、ブルースあるいはバラッドに潜む言葉にならない声の表象として提示されている。その声を捉えたのが公民権運動ナラティブであったといえる。そのナラティブの中に、神話の内部をスパイラル状に貫通して脱筆する銃の破壊力を読みとることができる。

(3) 20世紀以降の現代アメリカ演劇のひとつの大きな特徴は、ヨーロッパによるアメリカ大陸の発見・征服に始まるアメリカ史・歴史認識の再考・脱構築を目指す志向性にある。アーサー・ミラーの『黄金の時代』(1987) ユージーン・オニールの『皇帝ジョーンズ』(1920) アミリ・バラカの『奴隷船』(1967) と『奴隷』(1964) スーザン＝ロリ・パークスの『アメリカ・プレイ』(1993) と『トップドッグ/アンダードッグ』(2001) そしてヴェリーナ・ハス・ヒューストンの『ティー』(1987) という多様な現代アメリカ演劇テキストの流れが示すのは、ヨーロッパによるアメリカ大陸の征服から、アフリカと西インド諸島、アメリカを結ぶ中間航路の奴隷貿易、そしてマニフェスト・デスティニーによる西漸運動からアジアへの進出という地球を西回りに覇権を拡大した白い帝国主義が、他者を征服・支配し、スパイラル状の軌跡を残してきた光景である。その過程で、さまざまな神話の衝突、新たな神話の誕生が白い歴史というテキストに刻まれ、あるいはテキストから消し去られてきた。

(4) 銃/大砲はヨーロッパによるアメリカ大陸征服から続く帝国の植民地支配の象徴的手段であると同時に、過去から現在に至る帝国の軌跡を時空を超えて再現するメディアとしてアメリカ演劇の舞台で浮上する。地球を西回りに進む帝国のスパイラルが、逆に回る他者の力で反撃され、内側から揺さぶられるのは、アフリカを目指すアフリカ系アメ

リカ人の動き、アジアからアメリカにきた戦争花嫁物語に示されたとおりである。そして今、西と東へ向かう二つのベクトルがぶつかり合う中で、パークスが提示したように、支配と被支配、抑圧者と被抑圧者の二極構造の枠組みを出た、新たな人種のテキストが編まれようとしている。こうした志向性・動向も現代に至る何世紀にも及ぶ帝国と他者の歴史の上にたってはじめて成り立つものである。その歴史をどう捉えるかは新たな課題である。しかし、銃/大砲は、これまでも、そして21世紀のこれからも時空を超えた帝国支配＝神話のスパイラルを浮上させる強力なメディアとして作動していくに違いない。

(5) 19世紀末には、より性能の高い向い銃が作られ、銃の普及度は格段に増した。アニー・オークレイはそのような時代に、ワイルド・ウエスト・ショーのスターとして人気を集め、銃を文字通り、エンパワーメントに用いた最初の女性である。探偵小説や西部劇、タイムノヴェル、演劇、映画、ミュージカルを含めた大衆文化が、銃のイメージ浸透に大きな役割を果たした。このように銃文化が人々の生活の中に深く入りこむ中で、20世紀初頭には銃を持った女性が少なからず小説に登場するようになる。1930年代には、夫を撃ち殺す妻たちも誕生した。ヘミングウェイの描いたマーゴットは夫を背後から撃ち殺した。それが事故であれ故意であれ、銃を手にしたことによって彼女は力を得るのではなく、逆に言葉を発する力を奪われてしまう。

(6) 一方、グラスゴーの描いた女性たちは銃を手にするによって、それまでの世界を転覆してしまう。ところがその時、男たちはすかさずその事実を隠蔽し、その転覆をなかつたことにしてしまう。少なくともこの事件を通し、女たちが潜在的に持っている生態の生々しさが、転覆力の脅威がはっきりと示さ

れた。そして彼女たちが縛り付けられていた結婚神話、恋愛神話も女たちの手によって撃ち抜かれる。ハーストンの描いた世界では、銃は複数の声を獲得するための武器として機能する。1960年代以降になると、男性の領域を侵犯して銃を撃つ女の「かっこよさ」が認識されるようになる。撃つ女の「かっこよさ」を売り物にしたハリウッド映画も続々と登場する。彼女たちは男性顔負けの過激さを披露し、手にする銃もますます殺傷力を増している。しかしこれらの銃を持った強い女性たちが、必ずしも自由な解放された新しい女性を表すという保証はない。

(7) そもそも銃は、孤独なアメリカ人が茫漠とした荒野を征服するのに不可欠な、速度メディアと密接な共犯関係を結んでいたと考えられる。決して後戻りすることなく直線的に時空を超越し、瞬時にして欲望を実現するこの致命的なテクノロジーこそ、「<sup>マニフェスト・デスティニー</sup>明白な運命」を標榜するアメリカの純潔さの守護神だったのである。無垢なエデン的世界を構築するため、自らは手を汚すことなく死をいつなときでも賦与できる銃には、畏れと恍惚感が入り混じった崇高性が付きまとう。であればこそ銃は、崇高なまでに広大無比な空間に徒手空拳で挑まなくてはならない個人の護符となると同時に、彼らの不可逆的な征服それ自体を表象する格好の隠喩になりえたわけである。

(8)だが、このように銃によって裏書きされてきたアメリカの神話は、JFK 暗殺事件に象徴されるように、めぐりめぐって合衆国の国家身体の中枢を標的とするとき、脆くも自壊し、新たな神話へと組み替えられていく。合衆国大統領の頭部を狙い撃ちにしたあの衝撃的な暗殺事件において、銃は、カメラという有名性を孕んだもう一つのシューティング・テクノロジーによって代補されることに

なる。「撃つ/写す<sup>シューティング</sup>」という行為は、文字通り標的をこの世から「抹殺する」と同時に、フィルム上に痕跡として「蘇らせる」という、相反するベクトルをそれ自体に内包している。その結果、弾道さえも可視化しかなない映像により、死へと逢着する弾丸の向こうで絶命しつつある標的の姿が亡霊のごとく蘇る。しかもそうした亡霊は、テレビ画面での無限の反復を通じて、あたかも第二の生を賦与されたかのように増殖し始める。かくして、死をもたらされたはずの標的は、互いに代補し合う「撃つ/写す<sup>シューティング</sup>」を通じて、妖しいアウラを放つシミュラクルへと転位していく。その結果、撃つ者と撃たれる者は、メビウスの輪のように際限なく反転し、錯綜した悪夢のような連鎖へと開かれていく。さらなる悪夢は、放たれた銃弾と同化した撃ち手が、あたかも標的と合体するかのように死に向かって自らを投擲し、両者が見分けがたく輻輳するとき、究極的に実現する。9.11の自爆テロにおいて、この悪夢は現実のものとなる。

(9) ドン・デリーロは、『ホワイト・ノイズ』(1985)、『リブラ』(1988)、『フォーリングマン』(2007)をはじめとする小説において、アメリカの神話を彩る「銃」の直線的な弾道を内側から突き崩すとともに、なおかつ「捻れと回旋」に満ちた悪しき円環としての歴史の迷宮をも脱し、歴史の闇から「ナラティヴ」を救出しようとする。「銃」に対抗する「ナラティヴ」の可能性と限界を熟知したデリーロ文学の弾道からは、そのように揺らぎを孕みつつフィードバックを繰り返すポリフォニックな「ナラティヴ」を、エクリチュールとして再生しようとする試みが読み取れる。それはまた、「写す<sup>シューティング</sup>」をもってしても代補しきれない「撃つ<sup>シューティング</sup>」を、いつでも重ね書き可能なエクリチュールにより迎撃しようとする試みでもある。視差を逆手に取るこ

の戦略こそ、エクリチュールというパルマコンをもって標的を蘇らせ、モノフォニックな「銃」声が支配する神話のスパイラルから身を振り解こうとするアメリカ作家の迂遠な「遊撃の技法」だったのである。

(10)本研究は、日本アメリカ文学学会会長田中久雄氏より、「銃の文化表象という分野への果敢な試みと優れた成果」として2007年5月18日付『週刊読書人』において高く評価されたのみならず、『アメリカ学会会報』第164号、2007年、『英文学研究』第85巻、2008年、『アメリカ文学研究』第45号、2008年など、主要な学会誌の書評において高く評価された。このことは、本研究が、この分野の先駆的研究として大きな意義をもつことの証左となる。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計15件)

1 貴志雅之、「クイア・カップルの亡霊と遺産 テネシー・ウィリアムズの *Cat on a Hot Tin Roof*」、『立命館国際研究』第21巻3号、pp. 25-43、2009年、査読有

2 渡邊克昭、「9.11と「灰」のエクリチュール *Falling Man* における“nots”の亡霊」、『関西英文学研究』第2巻、pp. 115-37、2008年、査読有

3 辻本庸子、「銃声のとどろき アメリカ女性作家と銃」、『神戸外大論叢』第59巻6号、pp. 67-86、2008年、査読有

4 貴志雅之、「クイアのポスト・ヴェトナム ランフォード・ウィルソンの『七月五日』をめぐって」、『アメリカ演劇』第20号、pp. 90-111、2008年、査読有

5 中良子、書評「中村紘一著『アメリカ南部小説を旅する ユードラ・ウェルティを訪ねて』」、『英語青年』第154巻第9号、p. 51、2008年、査読有

6 辻本庸子、「生きる徴 Margaret Atwood,

Oryx and Crake」、『英語青年』第153巻、pp. 97-92、2007年、査読有

7 辻本庸子、「[介入]のすすめ Rey Chow, The Protestant Ethnic & the Spirit of Capitalism.」、『英語青年』第153巻第8号、pp. 492-494、2007年、査読有

8 貴志雅之、「パラダイムの逆襲 『フェフとその友人たち』に見るポリフォニーの幻影」、『アメリカ演劇』第18号、pp. 95-113、2006年、査読有

9 花岡秀、「酒の密造・密売と『サンクチュアリ』 「アクチュアル」を「アポクリファル」に」、『フォークナー』第8巻、pp. 39-47、2006年、査読有

10 花岡秀、「Sublimating the Actual into Apocryphal”: Bootlegging in *Sanctuary*, *The William Faulkner Journal of Japan on Internet*, No. 8、2006年、査読有

11 中良子、「James Baldwin の公民権運動 Blues for Mister Charlie における銃表象」、『主流』第67号、pp. 85-102、2006年、査読有

12 辻本庸子、「嘘をつく女: Alias Grace 考」、『神戸外大論叢』第56巻2号、pp. 157-72、2005年、査読有

13 花岡秀、書評「後藤和彦著『敗北と文学 アメリカ南部と近代日本』」、『英語青年』第151巻6号、pp. 48-9、2005年、査読有

14 渡邊克昭、書評“Walter Benn Michaels 著 *The Shape of the Signifier: 1967 to the End of History*”、『英文学研究』、第82巻、pp. 209-13、2005年、査読有

15 貴志雅之、書評「長田光展著『アメリカ演劇の「再生」』」、『中央評論』、第57巻1号、pp. 124-5、2005年、査読有

[学会発表](計6件)

1 貴志雅之、「Grover's Cornersの地政学 *Our Town*が持つサブリミナル・メッセージ

」、全国アメリカ演劇研究者会議第25回大会、2008年6月29日、エスカル横浜

2 辻本庸子、"From American Stories to Tokyo Kid: The Shifting Image of Japanese Immigrant"、NJAHS シンポジウム、"The Legacy of Japanese Women"、2008年3月22日、サンフランシスコ カブキホテル

3 貴志雅之、大井浩二、辻本庸子、岡本太助、川村亜樹、フォーラム「20世紀アメリカ文学の政治学」、第51回日本アメリカ文学会関西支部大会、2007年12月8日、京大会館

4 渡邊克昭、山下昇、田口哲也、山本秀行、森岡裕一、シンポジウム「共振する/交錯するメディアとアメリカ文学」、第46回日本アメリカ文学会全国大会、2007年10月14日、広島経済大学

5 花岡秀、「酒の密造・密売と『サンクチュアリ』 「アクチュアル」を「アポクリファル」に」、シンポジウム「フォークナーと大衆文化」、第8回日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会、2005年、10月14日、北星学園大学

6 辻本庸子、"White-Washed Icon: Mark Twain and Gender"、International Conference of Mark Twain Studies、2005年、8月5日、Elmira、New York

〔図書〕(計8件)

1 渡邊克昭、貴志雅之、花岡秀、辻本庸子、中良子、英宝社、『神話のスパイラル アメリカ文学と銃』、2007年、総頁数254

2 貴志雅之、岸純信、越智道雄、石戸谷結子、白石美雪、西村雄一郎、財団法人新国立劇場運営財団、『ブッチーニ 西部の娘』、2007年、総頁数36

3 辻本庸子、御輿哲也、新野緑、田川幸二郎、吉川朗子、西川健誠、難波江仁美、南川文里、ユン・ヘヨン、世界思想社、『移動の風景』、

2007年、pp. 102-126

4 花岡秀、中良子他、日本ウィリアム・フォークナー協会、松柏社、『フォークナー辞典』、2007年、p.13、pp. 77-8、pp.103-4、p. 107、pp.440-1、pp. 458-60、pp.477-8、p.587、p.590、pp.612-3

5 辻本庸子他、アメリカ古典文学を読む会編、南雲堂、『語り明かすアメリカ古典文学12』、2007年、pp. 178-184

6 渡邊克昭、花岡秀・辻本庸子・貴志雅之・山下昇他、世界思想社、『二世紀アメリカ文学を学ぶ人のために』、2006年、pp.45-55、pp.68-82、pp.84-97、pp.184-98

7 辻本庸子他、亀井俊介編、昭和堂、『アメリカ文化史入門：植民地時代から現代まで』、2006年、pp. 110-29

8 辻本庸子、田中きく代他、北米エスニシティ研究会編、『北米の小さな博物館：「知」の世界遺産』2006年、pp. 24-9

〔その他〕

6. 研究組織  
(1)研究代表者

渡邊 克昭 (WATANABE KATSUAKI)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
研究者番号：10182908

(2)研究分担者

貴志 雅之 (KISHI MASAYUKI)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
研究者番号：30195216

花岡 秀 (HANAOKA SIGERU)  
関西学院大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：40172944

辻本 庸子 (TSUJIMOTO YOKO)  
神戸市外国語大学・外国語学部・教授  
研究者番号：70217313

中 良子 (NAKA YOSHIKO)  
京都産業大学・文化学部・教授  
研究者番号：50237195